実際は自分が何歳の時の事であったか、 の ではなかった。 自分が四つの年の暮であったという 自分でそれを覚え

と綺麗になったのが、気も浮立つ程嬉しかった。「煤掃きも済み餅搗きも終えて、家の中も庭のまわことは、後に母や姉から聞いての記憶であるらしい。 りも 広々

のよ、えいこったろう……木っぱのような餅たべて…… 「もう三つ寝ると正月だよ、正月が来ると坊やは五つになる 油の

ような酒飲んで……」

を掛けた守りのお松が、草 箒とごみとりとを両手に持ったまは色が大へん白かった。自分が姉を見上げた時に、姉の後に 襷 袢天を着ていた。紫の半襟の間から白い胸が少し見えた。 姉を見上げた時に姉は白地の手拭を姉さん冠りにして筒袖のだ児供がなく自分を大へんに可愛がってくれたのだ。自分が なくなつかしかった。 さしい女であった。 かしかった。で姉の顔を見上げた目で直ぐお松の顔も見た。 可愛がってくれるのも嬉しかったけれど、守りの もなく嬉しかった。 少しかがみ腰に笑顔で自分の顔を見るのであった。 姉は自分を喜ばせようとするような調子にそれを唄って、 立ってて姉の肩先から自分を見下して居た。自分は のよくな お松は其時只かすかに笑って自分のどこかを い曇ったような白い顔で、 姉は其頃何んでも二十二三であった。 いつもかすかに笑う其目つきが忘れられ お松もとると十六になるのだと姉が云 少し 面 お松もなつ 自分は訳 姉の · 襷ţ,姉 ま

見てるようで口は聞かなかった。

分がめんどうがって出ようとするのを、 結び直してくれ、 あわてて後から付いてきて、下駄を出してくれ、足袋 かんでくれた。 朝飯をたべて自分が近所へ遊びに出ようとすると、 緩んだへこ帯を締直してくれ、そうして自 猶抑えて居って鼻を の紐を お松

は訳もなく寂しい気持のしたことを覚えて居る。 離れて、 お松は軒口に立って自分を見送ってたらしかった。 お松は其時もあまり口はきかなかった。自分はお松の手を 庭先へ駈け出してから、一寸 振りかえって見たら、

用をしながら、遠くから声を掛けてあやしてくれたけれど、 自分を暖まらしてくれた、 てもお松は居なかった。毎晩のように竈の前に藁把を敷いて 使にでも行ったことと思って気にもしなかった。日暮に お松はどうしたのだろうかと思った。姉がせわしなく台所の いつものように嬉しくなかった。 お昼に帰って来た時にはお松は居なかった。 お松が居ないので、自分は始めて 自分は お なっ

らね」と云わ 年きりで今日家へ帰ったのだよ、正月には年頭に早く来るか でいたそうである。 夕飯の時に母から「お前はもう大きくなったからお松は今 ħ て自分は平気な風に汁掛飯を音立てて掻込ん

れど、 云ったら「ねえやなんか居なくたってえい はねえやが居なくても姉さんが可愛がってあげるからね」と 所で、自分が 正月の何日頃であったか、 目には涙を溜めてたそうである。 . 一人遊 んで居ると、 表の呉縁に朝日 姉が雑巾がけ や」と云ってたけ が暖くさしてる に来て「坊や

って聞かせた。

だ様子ったら無かったそうである。それは後に母や姉から幾正月の十六日に朝早くお松が年頭に来た時に、自分の喜ん

へ一度つれてゆくつれてゆくと云った。

ままでどいってた……」「ねえやは、ようツたアなア、ようツたアなア、ようツたアなア。ねえやはい

度も聞かせられた。

ままになっていたそうである。ら盛りな自分が、じいっとしてお松におぶされ、お松のするら何まで出来るだけの世話をすると、其頃もう随分ないたずからお松は五ツにもなった自分を一日おぶって歩いて、何かを抱きしめて、暫くは顔を上げ得なかったそうである。それと繰返し云って、袖にすがられた時に、無口なお松は自分

泊って終った。自分は夕飯をお松の膝に寄ってたべるのが嬉 来て見ての様子で見ると、此の上一晩泊ったら、「愈」別れに てる内に帰ったらしかった。 白かった心持だけは未だに忘れない。 しかった事を覚えて居る。 気づかない間に逃げようとしたのだが、其機会を得られずに とても顔見合って別れることは出来ないところから、 少しもお松を離れないので、帰るしおが無かった。お松には くくなると気づいて、 お松も家を出て来る時には、一晩泊るつもりで来たものの、 をして聞かせた事を、其話は覚えて居ないが、 おそくも帰ろうとしたのだが、自分が 其夜は無論お松と一緒に寝た、 お松は翌朝自分の眠 自 分 お つ 面 の

ろ機嫌をとったらしかった。母はそれから幾度か、ねえやの処覚えてる。姉は頻りに自分にお松を忘れさせるようにいろいを置くのは良くない事だ」などと話してるのを聞いたように其後自分は両親の寝話に「児供の余り大きくなるまで守り

がお松 度も顔を振向けて背に居る自分に話をした。其度に自分の のついてる齢の棒を両手に五本ずつ買ってくれた。 けれど、まだ知らなかったお松の母が居るから直ぐにお松に きてくれたねえ」と云って母子して自分達を迎えた。自分は 頃 を自分の頬へ摺りつけようとするらしかった。 て外へ出た。菓子屋で菓子を買ってくれた。 あまえられなかった。 の」と云って自分を抱いてくれた。自分はお松はなつかしい なつかしい目でにっこり笑いながら「坊さんきまりがわるい 少しきまりが悪かった。母の袖の下へ隠れるようにしてお松 て駈け降りて来た。お松の母も降りて来た。「良くまア坊さん 汚くなかった。 高くのびて白い花が見えた。庭はまだ片づいていてそんなに 屋根の低い家が裏まで見透かされるような家であった。= の花が黒い湿 は母を囲炉裏端へ連れて行った。其内にお松は自分をおぶっ の顔を見た。お松は襷をはずして母に改った挨拶をしてから、 ていて、自分達を認めると直ぐ「あれまア坊さんが」と云っ 自分が母につれられてお松が家の庭へ這入った時 の薄い日影が庭半分にさしていて、 '庭半分程這入って行くと、お松は母と二人で糸をかえし の鬢の毛や頬へさわるのであった。 |った土に散っていた。往来から苅葺のかぶった 物置も何もなく、 母はお松の母と話をしてる。 母家一軒の寂しい家であっ 梅の下には蕗 お松は 赤い色や青い わ お松 四の臺が丈 お松は の 頬

夜坊さんはねえやの処へ泊ってください」と頻りに云ってる。母は、生薑の赤漬と白砂糖で茶を飲んで居った。お松は「今お松が自分をおぶって、囲炉裏端へ上った時に母とお松の

ってる。お松は自分が何と云うかと思うらしく自分の顔色を風で「おまえ泊れるかい夜半時分に泣出しちゃ困るよ」と笑自分は点頭して得心の意を示した。母は自分の顔を見て��ビホ

「泊れるでしょう」

見てる。

云う。と母に言ってる。母は自分の顔をのぞいて「泊れるかい」とと母に言ってる。母は自分の顔をのぞいて「泊れるかい」とに「こんな汚ない家だけれど決して寒い思いはさせないから」お松はこう云って熱心に自分に摺寄った。お松の母も頻り

「ねえやのとこへ泊れる」

そうしてお松は自分の膝の上へ抱上げて終った。自分がそういうと「さア極った」と云ってお松は喜んだ。

「おまえ泊れるかい」

ける、えいだっぺねい」と云った。 母は猶念を押して「おまえが泊ると極ればお母さんは出か

「お母さんは行ってもえい」

う事であった。

手にしゃべって出て行った。お松が家の本家のあるじだといったけれど、今夜是非お松を頼みたいと云うような事を、勝から、さげた手を振りつつ這入って来た。何かよく解らなかて立ちかける。する処へ赤い顔の背の高い五十許りの爺が庭自分がそういうと、母はいろいろ頼むと云う様な事を云っ

「困ったなア困ったなア」

なった。お松は「仕様がないねえ坊さん」と云って涙ぐんだ。んどころないと云う事で、自分は母と一緒に出掛けることにお松はくりかえしくりかえし云って溜息をついた。結局よ

自分を村境まで送ってきた事が忘れられなかった。悲しかったことと、お松が寂しい顔をうなだれて、泣き泣きそうして自分を村境までおぶって送ってくれた。自分も其時「又寄ってください」と云うのもはっきりとは云えなかった。

「さアここでえいからお松おまえ帰ってくれ」

と母が云っても、お松はなかなか自分を背から降ろさない

してお松にやった。お松は頻りに辞退したのを、母は無理に泣いた。自分もお松へ取りついて泣いた。母は懐から何か出わたしがきっと逢いにゆくからね」と自分の肩へ顔をあててう処で、自分をおろしたお松は、もうこらえかねて「坊さんで、どこまでもおぶって来る。もうどうしてもここでとおも

でも色のさえない元気のない面長なお松の顔は深く自分の頭それきり妙に行違って、自分はお松に逢わなかった。それっ

立っていたようであった。

お松にやって、自分をおぶった。お松はそれでも暫くそこに

に刻まれた。

になって間もなく死んだという事であった。なったが、夫が酒呑で乱暴で、お松はその為に憂鬱性の狂い七八年過ぎてから人の話に聞けば、お松は浜の船方の妻に